

プレスリリース 2023/7/20

ブルグント公女イヴォナ



2023年9月15日～10月15日

会場：アンダースロー

合同会社地点

企画概要

この度地点は、ポーランドの作家ヴィトルト・ゴンブローヴィチの傑作戯曲『ブルグント公女イヴォナ』をアンダースローのレパートリーとして創作・初演します。

2013年にオープンした地点のアトリエ「アンダースロー」は、これまでも数々の新作舞台が上演されてきた地点の本拠地です。ここで上演される作品は、〈レパートリー〉として制作され、長期にわたって継続的に上演される間に観客からのフィードバックを得、磨かれてきました。チェーホフやブレヒトといった古典戯曲から新進気鋭の日本の若手作家による現代戯曲まで、幅広いレパートリーによって鑑賞眼を高めてきたアンダースローの観客に向け、地点が満を持しておく最新作です。

『ブルグント公女イヴォナ』の主人公イヴォナは、劇中ほとんど沈黙している異例のヒロイン。戦間期に書かれたこの悲喜劇は、生贄を必要とする人間の特性を残酷かつコミカルに描き、流血や殺人といった劇的手法を巧妙に避けながら、主人公の死という最も劇的瞬間を描くことに成功しています。古典劇のパロディとしても、それらを刷新する現代劇としても、非常にウェルメイドな隠れた名作なのです。

本作の音楽を担当するのはポーランドの現代ジャズシーンを牽引するヴァツワフ・ジンペル。近年、舞台や映画への作曲も数多く手がけており、氏のミニマルな音楽性がこの戯曲全編を貫く抑圧された感情や、裏腹に軽やかな台詞群を際立たせることを期待しています。

あらすじ

皇太子フィリップ王子は、散歩の途中、無表情で人に嫌悪感を抱かせる娘イヴォナに出会う。王子は一目見た時からイヴォナが我慢ならない。あまりにも彼の神経を苛立たせるのだ。しかし、同時にまた、王子はこの不幸な娘を憎悪しなければならないという事態にも納得できない。彼の中で、若い男が魅力的な娘だけを好きになるという「自然の理」に対する反抗心が爆発し、彼はイヴォナと婚約する。王子の婚約者として王宮につれてこられたイヴォナは、そこで人々に破壊的な作用を及ぼし始める。怯えきった、物言わぬ存在により、誰もが自分自身の秘められた欠陥、汚れ、罪を思い起こすのだ。やがて王子を含め王宮の誰もが、イヴォナを殺害したいという欲望にあえぐようになる。「高みから」の殺意が抑えようもなく膨らんだそのとき、イヴォナは鮎の骨を喉に詰まらせて死ぬ。

ヴィルトルト・ゴンブローヴィチ

Witold Gombrowicz

1904年、ポーランドのマウオシーツェ生まれ。20世紀ヨーロッパ文学を代表する作家の一人。ワルシャワの高校、大学に学び、33年、短編集『成熟途上の記録』でデビュー。39年、アルゼンチンへ亡命。1964年以降はフランスに住んだ。67年、小説『コスモス』で国際文学賞を受賞。ほか主な作品に短編集『バカカイ』、小説『フェルディドゥルケ』『トランス=アトランティック』『ポルノグラフィア』など。



地点『ブルグント公女イヴォナ』

作：ヴィトルト・ゴンブローヴィチ

翻訳：関口時正

演出：三浦基

音楽：ヴァツワフ・ジンベル

出演：安部聡子 石田大 窪田史恵 小林洋平 / 秋元隆秀 姉川華（劇団ひまわり）

舞台美術：杉山至 衣裳：コレット・ウシャール 照明：藤原康弘 舞台監督：大鹿展明

宣伝美術：松本久木 コーディネーター・通訳：ニコデム・カロラク 制作：田嶋結菜

日程：

9月30日（土）19:00	10月8日（日）17:00
10月1日（日）19:00	10月9日（月・祝）17:00
=	=
10月3日（火）19:00	10月12日（木）19:00
10月4日（水）19:00	10月13日（金）19:00
=	10月14日（土）17:00
10月6日（金）19:00	10月15日（日）17:00

10月7日（土）17:00

全12ステージ

開場は開演の30分前

会場：アンダースロー 〒606-8266 京都市左京区北白川久保田町21 地下

料金：（全席指定／税込）

一般 前売 3,500円／当日 3,800円

学生 前売 2,500円／当日 2,800円

チケット発売日：2023年8月5日（土）10:00

チケット取扱：

▽地点 WEB 予約フォーム <http://chiten.org/reservation/>

▽teket

▽イープラス <https://eplus.jp>

▽ローソンチケット <https://l-tike.com/>

▽演劇最強論-ing（手数料無料 チケット代のみで購入可）<https://www.engekisaikyoron.net/>

主催：合同会社地点

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援）） 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：Fundacja Pomosty, The Adam Mickiewicz Institute

プロフィール

地点 (ちてん)

演出家・三浦基が代表をつとめる。既存のテキストを独自の手法によって再構成・コラージュして上演する。言葉の抑揚やリズムをずらし、意味から自由になることでかえって言葉そのものを剥き出しにする手法は、しばしば音楽的と評される。2005年、東京から京都へ移転。2013年には本拠地・京都に廃墟状態の元ライブハウスをリノベーションしたアトリエ「アンダースロー」を開場。レパトリーの上演と新作の制作をコンスタントに行っている。2012年にはロンドン・グローブ座からの依頼で初のシェイクスピア作品『コリオレイナス』の上演を成功させるなど、海外での評価も高い。2006年、ミラー作『るつぼ』でカイロ国際舞台芸術祭ベストセノグラフィー賞受賞。2017年、イブセン作『ヘッダ・ガブラー』で読売演劇大賞作品賞受賞。2022年12月、アンダースローの食堂「タッパウェイ」開店。観劇前後も含めたトータルな演劇体験をプロデュースする。

三浦基 みうら・もとい

地点代表、演出家。1973年生まれ。2007年、チェーホフ作『桜の園』で文化庁芸術祭新人賞受賞。2017年、イブセン作『ヘッダ・ガブラー』で読売演劇大賞選考委員特別賞受賞。その他、京都市芸術新人賞など受賞多数。2012年にはロンドン・グローブ座からの招聘でシェイクスピア作『コリオレイナス』を上演するなど海外でも高く評価されている。2023年、ロシア・サンクトペテルブルクのポリショイ・ドラマ劇場 (BDT) にて同劇場のレパトリー作品、ドストエフスキー原作『罪と罰』を演出。著書に、『おもしろければOKか？ 現代演劇考』(五柳書院)、『やっぱり悲劇だった「わからない」演劇へのオマージュ』(岩波書店)。



photo: Hirotaka Matsunaga

ヴァツワフ・ジンペル Waclaw Zimpel

ポーランド西部のポズナンで育ち、ワルシャワを拠点に活動。6歳からバイオリンとクラリネットを学ぶ。クラシックを自身のキャリアのスタートとしながら、ジャズや即興演奏への並々ならぬ熱意が、ラオスの原子ハーモニカ・ケーンといった木管楽器との出会いや、電子音楽での精力的な活動へと彼を導いた。主なアルバムに「Lines」(2016年)、「Massive Oscillations」(2022年)。演劇・映画・振付とのコラボレーションも多く、日本では2024年にゴンブローヴィチ原作『コスモス』(演出・脚本・振付：小池博史)の公開が控えている。

地点によるアンダースローでの主な上演 (2013-2022)

2013年 ファッツァー

作：ベルトルト・ブレヒト
翻訳：津崎正行



第一次世界大戦中の脱走兵を描いたブレヒトの未完の戯曲『ファッツァー』を本邦初上演。バンド「空間現代」による音楽が、あたかも機関銃のように俳優を撃ち、音と音の間隙を縫って台詞が発せられる。アンダースロー初期の代表作であり4ヶ国7都市で上演。

2017年 ブレヒト売り

テキスト：ベルトルト・ブレヒト



神・金・愛・戦争・芝居というテーマ別に20以上の戯曲・詩から言葉を抜粋したコラージュ作品。全篇に敷き詰められた軽快なリズムトラック、古い教会を彷彿とさせる声の反響する空間、世界をスキャンニングするような照明など、アンダースローならではの楽しみがたくさん詰まった作品に仕上がった。

2017年 ヘッダ・ガブラー

作：ヘンリック・イブセン
翻訳：毛利三彌



近代演劇の父、ノルウェーの劇作家イブセンの戯曲を舞台化。横並びに配置された5台のゆり椅子が登場人物の揺れ動く心理と醒めない悪夢を表現し、短い言葉のやりとりが物語を加速させる。コレット・ウシャールによる細部までつくりこまれた美しい衣装が圧巻。読売演劇大賞作品賞受賞作。

2017年 汝、気にすることなかれ

作：エルフリーデ・イエリネク
翻訳：谷川道子



「シューベルトの歌曲にちなむ死の小三部作」が副題。観衆に自らの肉を投げつけながら大女優の語る演技論・俳優論。白雪姫と狩人、ふたりが語り合う噛み合わない真・善・美。作家自身の父親像が投影された〈さすらい人〉による国家論。一度聞いたら癖になる、ノーベル賞作家エルフリーデ・イエリネクの長口舌はここでも健在！

2017年 どん底

作：マキシム・ゴーリキー

翻訳：神西清



空間現代が初めて生演奏ではなく楽曲提供のかたちで関わった作品。挿入歌『どん底の歌』をはじめ革命歌や昭和歌謡をオリジナル楽曲とコラボした音楽は終始作品と並走し、貧しい人々が集う木賃宿を取り巻く壮大な世界を活写した。2021年版では新しいシーンが追加され、音楽と台詞の結びつきはより強くなった。

2018年 正面に気をつける

作：松原俊太郎



『ファッツァー』をモチーフに、松原俊太郎が書き下ろした新作戯曲の舞台化に再び空間現代を生演奏で迎えて制作。さまざまな死の記憶をまといながら再び現代に現れた英霊たち。俳優の身振りと同期して再生／停止が繰り返される音楽は、やがてルールを逸脱し、反転し、声と共に振動する。

2021年 地下室の手記

原作：フョードル・ドストエフスキー

翻訳：江川卓



ドストエフスキーを五大長編へ至らせる契機ともなった中編を舞台化。舞台前面にスクリーンを配し、リアから投影したプロジェクターで映像とともに人物の影を映し出すことで、まったく新しい視覚体験を伴う舞台作品となった。陰鬱な原作のイメージを裏切る軽快なパーカッションのリズムが、自意識に苛まれる現代人をユーモアを込めて描いたドストエフスキーの視座を示した。